



TITLE:

# 資本主義の純粹理論

AUTHOR(S):

高田, 保馬

---

CITATION:

高田, 保馬. 資本主義の純粹理論. 經濟論叢 1937, 45(6): 780-796

ISSUE DATE:

1937-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131035>

RIGHT:

# 東京帝國大學經濟學會 經濟叢論

第六號

第四十五卷

昭和二十二年十二月一日發行

## 論叢

資金の増減伸縮の機構

經濟學博士

小島昌太郎

社會的文化的變動の形式

文學博士

米田庄太郎

資本主義の純粹理論

文學博士

高田保馬

## 時論

國稅の部分的改正

經濟學博士

沙見三郎

## 研究

ナチス政策と獨逸社會保險の政革

經濟學士

中川與之助

明治維新の經濟的意義

經濟學士

堀江保藏

再保險の經濟的本質

經濟學士

佐波宣平

立地理論の一展開

經濟學士

菊田太郎

## 說苑

ゲルストナーの經營分析論

經濟學士

岡部利良

スウィゲティのダンピング理論

經濟學士

岡倉伯士

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

本誌第四十五卷總目錄

（禁轉載）

## 資本主義の純粹理論

高 田 保 馬

これはレーニン帝國主義論への批判といふ意圖をもつて執筆したるものである。此論文に述べたるものは私の立場そのものであり、それに基づくレーニン説への批判の方向である。此批判のやゝ立入つた内容は稿を改めて論じようと思ふ。大體こゝで私の論じようと企ててゐることは、資本主義だけから導き出され得る結論、従つてマルクス主義の内容は現實に實現せられず、反對の事實が世界にあらはれてゐる。マルクス主義が現實を説明し得ないといふのは、その意識しない情意的、非資本主義的條件が作用してゐるからである。

### 一 資本主義

人間の社會の内部には、不斷に優越のための要求が渦まいて居り、其結果として種々なる從屬、支配、指導等の組織が生れる。資本主義はかゝる優越のための組織の一形態として解せらるべきである。かるが故に、優越の要求即ち力の欲望を離れて資本主義はない。けれども、此要求の作用するところ、常に資本主義があると云ふわけでもない。力の欲望がある特定の社會組織又は社會段階と相まつて、資本主義を生む。

資本主義經濟は、特定の内容をもつ經濟として、又は社會組織として考へらるるが、更に一般的には、かゝる經濟又は社會に動いてゐる傾向、又は動機をさす。それは利潤の爲に利潤を追求することである、いはば利潤の

狩獵である。資本の要求は利潤を得て之を社會奉仕の用に供しようとするでもなく、自己の生活に浪費し盡さうとするでもない。たゞ之を蓄積して資本となし、此資本から利潤を得ようとする。利潤そのものの爲の飽くことなき追求、これを一面よりいへば、資本の際限なき増殖の要求、これ即ち資本主義の姿である。従つて資本主義に於て前提とせらるるものが二ある。一は利潤の可能であり、他はそれを追求せしむる原動力である。

利潤が成立することは、資本が成立することを意味する、二者は表裏の關係に立つものである。ところで、利潤の成立は何よりも、營業乃至賣買の完全なる自由を豫想する。封建制度の鐵鎖まづくづれて、經濟的活動が自由に行はるることを要する。次に、自由なる勞働者の存立を要する。資本の利潤は勞働を買ひ生産物を得て之を賣放つといふ過程に於て成立する。それ故に、資本は何よりもまづ勞働を買はなければならぬ。而も此自由なる勞働者は、領主又は地主の情誼、それらに對する隸屬から解放せられて生活の保障を失ふと共に、自ら雇はるることの自由を得るところに成立する。此意味に於て、封建制度の崩壊は、一方に於て自由なる資本を作り他方に於て自由なる勞働を作り、此結合の間から利潤が成立するに至る。けれども、利潤の成立は第三のものを必要とする。それはいふまでもなく資本そのものの蓄積である。これが漸次の節約によつて行はれたと見るのは、一の架空の物語である。封建地代の蓄積、植民地乃至外部市場からの強力詐取による収益の蓄積等の如き、權力を通して行はれたところの蓄積がかかる第三の條件を用意したと見るべきであらう。要するに封建制度といふ一の權力組織が一方に於て、資本蓄積をまづ用意すると共に、他方に於て自己の崩壊により勞働と資本とを自由ならしめたと見るべきであらう。

力の欲望の作用は歴史の如何なる段階に於ても、やむときはない。たゞ社會組織の如何によつて其作用の様式を異にするのみである。封建時代に至るまで久しき期間、それは特權の形成、維持として作用しつゞけて來た。別して封建制度を見よ。身分の制度は人をして生れながら諸侯たらしめ、職工たらしめ、その職業に伴ふ各の特權を與へてゐた。此特權は國家の武力によりて直接に支持せられたところである。場合によつては、直接なる制裁の威嚇によつてさへ維持せられてゐた。然るに封建制度の終ると共に、個人の力の欲望の満足はもはや、かゝる身分といふ特權の中に求めらるることは出來なくなつた。従つて特權の追求に代る他の追求、特權に代る他の目標が興へられねばならぬやうになつた。此目標が即ち資本であり、資本増殖のための利潤である。そこで、身分の制度から解放せられたる個人は、此新しき目的に向つて努力を集中するに至つた。これ即ち資本主義のまことの姿である。従つて、此追求の目的は單なる消費、又はより豐なる消費や享樂ではない。

個人は自己の如何なるものであるかを、其活動によつてのみ知ることが出来る。資本主義の如何なるものであるかは、其歴史的發展によつてのみ知らるるであらうし、之を創造したる神ありとしても、彼はこれが製作の跡によつてのみ知り得るであらう。此意味に於て、資本主義の何であるかを知ることが、其歴史的發展をあとづけることである。けれども、其ことは此發展の中にあらはれたる斷片的事實を蒐集することではない。其中に動いてゐる資本主義といふ中核又は精神によつて統一し、理解し、それらが何故に必然であつたかを明にするのである、まことの意味に於てあとづけることではない。

## 二 資本主義の純粹理論

資本主義即ち利潤の追求、又は利潤の爲の利潤の追求といふ精神が他の動機に拘束せらるるところなく十分に發揮せらるるならば、それは如何なる方向をとつて進むであらうか。まづ、それは競争資本から獨占資本に向つて進むであらう。また、外部市場の獲得に向つて進むであらう。轉じて社會經濟内部に於ける狀勢を見るならば、失業の増加と勞銀の低下とをもたらすであらう。又商品の過剰をさける爲の獨占的統制が進行するであらう。なほ對外的關係を見るならば、各國資本の結合が進行するであらう。けれども、これだけの方針がすべて現實のものであるかと問はるるならば否と答へる。たゞ資本主義の精神が、従つて資本主義經濟が純粹に自己を展開してゆくかぎり、かゝる傾向をとるものと考へる。

(1) 競争資本から獨占資本へ。資本主義ははじめ群小資本、即ち中小企業の對立競争であつた。それによつて價格は最低の生産費にまで切り下げられてゐた。けれども競争は結局弱者の敗北を意味する。一方には、資本の蓄積、大規模生産の勝利が進行するにつれて、他方に於ては殘存資本の結合によつて、獨占的な大資本が支配する時期に入る。此時期にあつては、各企業の資本が莫大なる額に達するのみならず、トラスト、カルテル、コンツェルン等の企業結合が皆何等かの獨占的性質をもつ。中小の企業は殘存するにしても、競争の進行によつてまだ取除かれざる間の過渡的殘存形態をなすに止まるか、又は小經營を有利とする特殊の産業に限られる。大體からいふと、此獨占資本の勝利は中小資本の没落を意味する。企業が個人の資本を中心としてゐた限り、此點は

肯定せられねばならぬ。而して、これらの資本によつて衣食したるものは必然に無産者の列に陥らざるを得ない。無産者の階級は其人口の自然増加によるのみならず、他の階級からの流入によつて其容量を増大せしめる。

獨占資本の時期はまた同時に、金融資本の時期として知られる。即ち信用制度の發達は、銀行又は其他の金融機關の手中に巨額の資本を集積させる。産業の大規模となるにつれ、必要とする資本は勢、之を銀行に仰がざるを得ざるに至る。銀行資本の産業に流入したるもの、他面よりいふと産業資本と銀行資本との融合したるもの、これが即ち金融資本である。

(2) 外部市場への進行。資本の蓄積の進行につれて、生産物は増加し、従つて其需要範圍が漸次に擴張せられざるを得ぬ。一方に於て、資本主義は其生産の擴張につれて其内部に市場を擴大し得るとも考へ得る。即ち投資の増加は所得の増加、需要の増加を伴ふ。けれども、節約の歩調がある程度をこゆる場合には、生産の過剰を來さずといふ保障もない。其上、需要が大であればあるほど、資本の利潤率は大である。かくして、生産物の賣込先が次から次へと追求せらるることとなる。その對象となるものはまづ國內に於ける非資本主義的外圍、即ち主として農村であらう。勿論資本主義の發達に對して、農村のもつ意義は決して、かゝる生産物需要先といふに止まらず、生産擴張に伴ふ必要人口の供給先であり、同時に不況に於ける過剰人口の吸收先ですらもある。けれども、一通り農村が市場として開拓せらるるときには、其賣込の努力は外部に向はざるを得ぬ。

外部に於ける市場の獲得の要求はかくて最も自然であるといはざるを得ぬ。けれども、各國が自國産業を保護しようとする場合にあつては、此外部市場を他の資本主義國に求むるより、文化の低い地域に求むることが有利

である。而もこれらの地域との接觸を最も密接にする爲には其武力を以て、之を自國の勢力の下に置くことを有利とする。植民地半植民地の獲得の努力が行はれる。別して、單なる商品の輸出にあつては相手の購買力が乏しい。それゆゑに、資本輸出が行はれることとなる。これは一面、高き利潤を求めての資本の動きと解せらるるが、他面から見ると、大抵それは物資ことに資本財の輸出に外ならず、外資輸入國の外資はこれらの代償として投資國に支拂はれる。資本輸出が此の如く産業資本の輸出であるときには、相手國に仕事と所得とを與へ、これによつて又新なる購買力を作つてゆく。而も、投資の機會（鐵道、鑛山、港灣）を得、又債權を確保するためには、一層確實に相手を勢力範圍の中に置かねばならぬ。更にまた、文化の低い地方から原料を低廉に吸収することの必要も同一の方向に作用する。勿論これは本國にとつては、商品の賣上を得る爲ではなく、其生産費を安くする爲に作用するのであるが、多くは植民地自體に於ける投資の結果として資源の開拓の行はれることを考へると、資本輸出の一面と見るべき部分も多い。要するに、資本の蓄積、國內販路の狹隘、利潤の低下につれて、外部に商品と資本とのはけ口を求め、此はけ口を確保するが爲に、勢力範圍の擴張が求められる。

(3) 失業の増加と勞銀の低下。資本主義の發達に伴ふ資本の側の狀態が獨占に導くといふならば、その勞働の側に於ける狀態は貧乏に導くといふべきであらう。資本の蓄積につれて、資本の有機的構成は高度化する、即ち大規模にして有利なる機械が利用せられる。それにつれて資本の必要とする勞働の數量は相對的に、即ち資本との割合から見て減少する。勞働人口の増加の歩調が止まらざる限り、失業が持續的に存立する。加之、増加する資本が益々多く海外に輸出せらるるに及びて、それから來るはずの勞働の需要は國內から外部に去る。此傾向が



また、失業を増加せしむる傾向をもつであらう。而も、勞働者が勞働以外に衣食の道をたざるものである限り、失業の増加は勞働の供給價格の低下とならざるを得ず、勞銀は愈々低下する外に道がないであらう。中小資本の没落は無産者の數量をまし、而も新舊の無産者はともにあけて、此貧乏深刻化の共通運命に陷る外はない。

(4) 商品過剰と獨占的統制。資本主義經濟は利潤の追求を眼目とする。其結果、利潤の著しき部分が蓄積せられて新なる資本となり、それによつてまた利潤が追求せられる。而もかくして増大しゆく資本によつて利潤が實現せらるるためには、増大してゆく資本の生産物が賣らるることを必要とする。ところがこれを買ふところの購買力、即ち需要はいづこから來るか。一方では資本の利潤から。けれども、資本の利潤のうちの著しき部分は蓄積せられる、それからの需要は國民生産物の小部分に過ぎぬ。需要の大部分は勞働者の勞銀から來る。ところで、資本の利潤の増大の要求は必然に勞銀に對する壓迫となる。それは個々の勞働者の勞銀を切り下げ得ぬにしても、大規模なる機械の採用によつて、其目的を果さうとする。賣らるべき生産物は増加し、之を買ふべき購買力は其源泉に於て切り下げられようとする。勿論資本の増加は、生産の計劃が順調に進行する限り、必要なる購買力を作るにしても(2)の部分参照)、かゝる計劃に従つて生産が擴張せらるるとは限らず、利潤の追求の努力が加はるほど商品過剰の傾向も亦加はると見るべきである。勿論、商品過剰が單に生産の不均衡から來るか、又は蓄積過剰そのものから來るかの問題には、こゝに於て立入らない。此生産過剰の壓迫は景氣の波動によつて特に深刻にせられる。此場合に於て、獨占の段階に達したる資本は之を傍觀するはずはない。そこに獨占的統制が行はれる。即ち巨大なる資本は容易に結合によつて獨占を作り上げる。それとともに、需要を見積ることによつて生

産の統制を行ふ。勿論今までの事實としては、獨占が必ずしも競争を排除せずといはれたことに、誤りはない。けれどもかういふ表現には二の事が意味せられてゐた。たゞ巨大なる財閥といふほどの意味が獨占到興へらるることがある。さういふ場合に、獨占が競争を斥けないのはいふまでもない。又獨占は獨占的となつた各産業間の競争を排除するものでもない。けれども、獨占が獨占内部に於ける競争を斥け得ることは事實である。それと共に、獨占化したる産業間の競争は自らそれらの結合に導く。これは同一産業分枝に屬する諸企業の結合するが如く自然の傾向である。而して此傾向の究極する所は普遍カルテルにありといはざるを得ないであらう。勿論、現實に於て、そこまでの進行を妨げる幾多の事情を認め得ないではない。けれども利潤の追求の傾向が必然に導くところは、一産業分枝の結合、ことにカルテルであり、進みては幾つかのカルテルの結合であり、更に進みてはその普遍的なる結合であることは争ひがたい。かゝる組織の下にあつては、需要は一に獨占的企業の統制の下にあると共に、供給もまたその統制の下にあることになる。従つて二の調和といふことも必ずしも困難のことではない。商品過剰の事實を此方面から取除くといふことも考へられ得る。

(5) 國際資本の結合。國內に於て、資本の利益は自ら其結合に導き、結合は獨占到導く。國內的に結合したる獨占資本は自ら、外部ことに植民地の市場と資源を求めて、外國の獨占資本と相對立する。その間に不斷なる競争が行はれ、此競争に於て優越せる地歩を占むるが爲に國家權力と資本との結合を生ずることも、前に述べたるが如く自然である。けれども、國內の資本の間に競争よりも結合を選ばしめたる事情が國際間にも作用せぬはずはない。結局、國內に於て資本の結合に導くものは、最後まで競争することから生ずる損失と危険とである、こ

れが當然優越的地位にある少數の大資本を妥協に傾かしめる。國際間に於ける獨占資本の對立について考へよ。最後まで競争することから來る損失は此場合といへども顯著である。その上、對立が究極には戦争に導き易い。さうすると、危険は單に資本の損失だけに止まらず、一國存亡の運命にまで及ぶ。資本主義はあくまでに合理的なる利潤の追求を其生命とする。此立場からいへば、國內に於ける資本の競争をさけるよりも、更に一層有力なる理由を以て、國際間の資本の競争を避けるはずである。従つて資本主義の必然的な歸結は、國際的な資本の結合であるといはざるを得ぬ。これはいふまでもなく、國內に於て普遍カルテルを形成したる資本が國際的に結合することを意味するのではない。普遍カルテルへの進行は一の道である。國際資本の形成は他の一の道である。一々の産業又は産業分枝に於ける獨占資本が國際的に接觸するところ、自らその部分に於ける國際的獨占資本を形づくるべき運命にある。これは國際資本主義としての超帝國主義の議論である。私は超帝國主義的な獨實に於て進行しつゝあるといふのではない。たゞ資本主義の中核が十分に自己を貫き徹すならば、即ちそれが純占資本の結合が現粹なる發展をとげてゆくならば、そこに進む外はない。現實がそこに進まずとするならば、別にさうさせるものがあると考えなければならぬ。

上に述べたところは、資本主義の本質から導き出さるところである。問題はいふ主張、具體的にいへば導き出されたる結論が、事實に於ていかやうに現はれてゐるか、といふことである。次に之を考察することにしよう。

### 三 人口過剰と商品過剰

人口法則のあるものを前提とすることなしに、資本主義の本質から直に人口過剰が論結し得らるるとは考へられぬ。可變資本の増加よりも人口増加、従つて勞働供給の増加の速度の大なることが、論證せられてはじめて、所謂相對的人口過剰の必然性が導き出さるるわけであるが、今まで、さういふ論證が企てられてゐない。一部の論者は、資本主義の發展性そのものが常に過剰人口、即ち産業豫備軍の存在を必要とする、といふ主張によつて過剰人口の必然性を論じようとするけれども、かういふ目的論的説明は因果的必然性を證明し得ない。加之、資本の有機的構成、従つて可變資本の數量は生産財の價格に依存するから、勞銀の高さを離れて定まりうるものではない。勞働の供給の全部を吸収しうるやうに、この有機的構成が適應し變化せしめらるると見るのが、近代理論即ち均衡理論の結論である。たゞかういふことはある。勞銀をある限度以下に低下せしめようとする困難がある。それゆゑ、勞銀を低下せしめ得ざる資本は勢ひ、生産組織従つて資本の有機的構成を、勞働を少く用ふる方向に導く。かくして人口過剰が必然となる。少くとも、經濟的に人口の相對的過剰がある。此論理は如何ともあれ、この人口過剰論を承認するとしよう。而して人口過剰の理論を現實にあてはめて見よう。なるほど失業は不斷の事實である。だからそれにつれて勞銀は低下し貧乏は深刻化すべきはずである。けれども大戰までの事實に徴するに、失業の不斷なる存在にも拘はらず、勞銀は低下しないのみか、大勢としては徐々ではあるが、若干の上昇を示してゐる。これは無産者の勢力の擡頭といふ政治的事情に負ふものとしか考へられぬ。資本主義經濟

の性質だけからは、全く理解しがたいことである。加之、失業はなるほど、經濟的にのみ見ると、相對的な人口過剰であるけれども、進みて政治的な範圍をとり入れて考ふれば、それが必ずしも人口過剰を意味するものとはいひがたい。資本主義の發達が十分であるほど、所得の國家權力による再分配、即ち國家の手による分配修正が行はれる。而して、經濟的に見て過剰なる人口が政治的に見ると過剰ではなくなる。過剰人口の必然、進みではその増大の必然に關する主張は、分配に對する政治の干渉を考ふるときに、支持し得られなくなる。政治的作用は過剰人口と、それからの必然的な結果としての貧乏の深刻化とを、ともに排除することとなる。

商品過剰の理論を前節に於て、一應これを承認した。勿論詳細なる點に立入るときには、なほ種々吟味を要する點がある。蓄積の過剰から消費需要の不足を來して商品が過剰となると述べたけれども、これには理路に於て飛躍がある。資本の蓄積によつて生産物の増加を來すといふことが論證を加ふべきことがらである。資本主義生産の機構を見るに、資本の増加と生産物數量の増加との間に、單純の平行的關係が支配するのではない。生産方法の變化、別して固定資本存續年數の増加によつて資本と生産物價額との比率は種々なるものとなる。換言すれば、一定の期間に於て生産の用に供せられたる資本の中から消耗して補償を要するもの、及び資本總額に對する此期間の利子がいはゞ生産物價額に含まるるわけであるが、利子歩合に遞降の大勢があることは姑く別としても、前者即ち資本回轉率の逆數に當るものは、全資本の中、中間生産物の占むる比率の増加と共に、固定資本の比率の増加すると共に、又固定資本存續年數の増加すると共に減少する。而してこのことは、資本が増加しても、生産物價額のこれに對する比率が減少しうることを、從つて生産物價額のかへつて減少し得ること示してゐる。而も

それは單なる可能たるに止まらず、資本主義發達の大體の傾向ですらもあつた。資本の蓄積に伴ふ金利の低下、これに伴ふ固定資本の採用及びその存續年數の増加、技術の發達に伴ふ固定資本の壽命の増加、これは不斷なる事實であり、それによつて資本の飛躍的増加あるに拘はらず、生産物價額はあまりに増加してゐない。けれども、一面から考ふると、蓄積がどこまで行はれても、その生産物が増加せずといふのではない。資本が現在の生産物生産のために吸収し得らるる限度をこえて蓄積せらるるならば、生産物の増加となり、生産過剰をもたらし得る。今までの商品過剰はかゝる性質のものとしてのみ、理解せらるべきものではないかと思ふ。

前述の商品過剰論は全く政治の側の作用を無視してゐる。前述の議論の組立にあつてはたゞ賣買といふ經濟的過程のみが考の中にとり入れられてゐる。けれども、今日國家は最も大なる消費者であり、而もその需要は二の方面から急速に増加しつゝある。一は社會政策的經費の増加であり、他は國家自體の機能（國防教育其他の文化的施設）の擴充に伴ふ經費の増加である。これらの増加は、一方に於て民主的政治組織の故に、他方に於ては國際對立の故に生ずる。無產者が其生活を安定せしめ又向上せしめようとする要求、有產者が不況を打開しようとする要求は、共に政府に迫つて經費の増加を促す。國際對立の狀態は軍備の果てもなき擴張の競争を招致する。かゝる政治の作用は、商品に他の廣大なる販路を與へて來た。而して此傾向は今後ともあくまで進行するであらうし、商品過剰の程度、從つて恐慌の程度が生産擴大と共に、愈々深刻化するといふ主張は到底支持し得られざるものである。

勿論、此外にもなほ顧慮せらるべき事情がないのではない。商品過剰と恐慌とが愈々深刻になるといふ主張は、

歐洲大戰までの事實によつて否定せられた。そこで、此主張を支持する爲に他の事情がとり入れて考へられた。それは外部市場の開拓であり、ことに植民地市場の獲得である。此外部市場への賣込によつて大戰に至るまでの恐慌緩和が實現せられ得たのであるが、世界の植民地分割もすでに世紀末を以てほぼ終へてゐる。従つてそれよりは此方面から來る狀勢の緩和はない。従つて資本主義の近き將來にはたゞ、恐慌と没落とのみがまつてゐる。かういふ議論については、まづ外部市場の獲得がどれだけ商品過剰を緩和し得るものであるか、次に果して新なる市場といふものは残されてゐないものであるか、これらの點につき十分なる検討を必要とするであらう。前の點については、こゝに論及しない。後の點についてはなほ残されたる問題がある。なるほど、世界の殆どすべての部分は何等かの形に於ける勢力範圍となつてゐよう。けれどもそのことと、市場としての開拓が完成してゐることとは、自ら別の問題である。今日、交通機關の不備の爲に十分に開拓せられざる市場がないとはいへぬ。更にまた、生産力の發達、之に伴ふ生産物價格の低落は、今まで裸の種族に着物をきせるやうに、新なる市場を作り上げるであらう。更に進みていへば、一定の地方に新なる資本を投下することは、自らそこに市場を作り上げてゆくことともなる。植民地の分割が終るといふことは外部市場の開拓已に終るといふことを意味しないはずである、

#### 四 對外關係の問題

商品過剰は外部市場開拓に向はしめたのであるが、此努力がどこまで本來の目的を達せしめ得るかは姑く別の

問題とする。資本主義の本質はあくまで國際資本の結合、一種の超帝國主義の形成に導かねばならぬことは、前述の如くであるが、現實には如何なる事實が展開せられてゐるか。

いふまでもなく、國家權力と獨占資本との結合、いはゆる帝國主義、詳言すれば獨占資本的帝國主義である。而して植民地の爭奪に基くところの世界戰爭である。資本による國際的結合の代りに資本による國際對立國際衝突である。けれども、このことは前述の考察の誤謬を示すものであるか。換言すれば、資本主義の本質に關する前述の考察が誤つてゐるのであるか。さうではない。現實の資本主義經濟はたゞ單に經濟原則によつて支配せらるる抽象人の經濟ではなく、いはゞ具體的な人間の營む經濟である。あらゆる具體的な内容を以てみたされたるところの民族に於て、營まるる經濟である。資本主義經濟そのものの本質の展開が、民族的なるものによつて變容を受ける。此變容として見るときに、國際對立も世界戰爭も、何等不思議に見らるべきものではない。

一民族國家内部に於ける獨占資本は、それが經濟原則に徹する限り、國境をこえて、互に手を握るはずである。けれども、ある情意的なるもの、不合理なるものがあつて此結合を妨げる。資本の國際的對立はこれによつて生ずる。資本の結合傾向は不合理なるもの、民族對立の傾向によりて妨げられる。資本が對立を生むのではない、對立が資本の結合を妨げるのである。資本は一たび別々のものとして分立するときに、本來敵對的のもの、結合がくひとめられたる以上、其對立は衝突に導かねば止まなかつた。世界大戰はたゞ此の如くにしてのみ理解し得られよう。従つて將來の國際關係が如何なる姿をとつて進むであらうかといふことは、一に、二の事情によつて決定せられる。一方に於ては、此民族對立といふ非合理的傾向が如何なる動きを見せるかといふことである。



共同社會より利益社會への一般的方向は必ずや、それに若干の變化を生ぜしめずには止まないであらう。他方に於ては、國際間に於ける資本の結合を促すべき事情が如何やうに進展するかといふことである。世界の交通は愈々頻繁に稠密になつてゆくであらう。それだけ、各國の資本の貸借、協力、損益經營に於ける連鎖も益々加はつてゆくことであらう。民族として集團的に對立するところに個々の資本の利益の網が錯綜を加へてゆくことであらう。大勢からいへば、資本主義そのものの國際結合的な傾向は愈々その力を加へてゆくであらう。

けれども、將來の國際對立が如何なる形をとつてあらはるかといふことについては、なほ各國内部に於ける資本主義經濟の發達と、既に外部に獲得せられたる市場との釣合に依存するところも少くない。若しかの發達が外部市場の所有に比例して進行するならば、國際的な對立もたゞ潛勢的な姿に於て進行するに止まるであらう。けれども事實は果してさうであらうか。

これについては、外部市場ことに植民地市場の性質について考へねばならぬ。最もよくこれを開拓したところの先進資本主義國は最も多く植民地からの利益を吸収する國である。それが貨幣又は貨幣債權の形に於て吸収するか、物資の形に於て吸収するか、それは何れでもよい。吸収したるものは當然其生活程度に於て高い。同時に、賣込める商品の對價、資本の利子が貨幣の形に於て流入する限り、物價に於て高い。若し金本位を離脱してゐるとすれば、爲替が同様の結果をもたらすであらう。かゝる事情はこれら先進資本主義國の生産費を高め、物價を高くし、ひいては商品の販路そのものを狭くする。資本主義國が勢力範圍に於て豊富であり、所謂搾取の程度に於て強ければそれだけ競争の條件に不利となる。此不利はたゞ一方に於て技術の優秀、他方に於て武力乃至

政治的勢力の優越によつてのみ補はれ得る。この補償がない限り、後進の資本主義國が漸次に先進の資本主義國を壓迫することを覺悟しなければならぬ。私は歐洲大戰前に於ける獨逸の地位、今日に於けるチエツコ・スロヴァキアの地位を此の如きものと理解しようと思ふ。

けれどもこれは歐羅巴資本主義内部に於ける問題であるに止まらぬ。同時にまた、資本主義國とその市場として開拓せられたる植民地乃至半植民地的後進國との關係である。外部市場の開拓は早晩資本輸出を意味し、資本輸出は資本財の賣込を伴ふ。賣込まれたる資本財はやがて後進國に於ける生産設備となる。資本輸出が久しきに亘つて行はるるほど、設備は愈々完成せられる。此設備の完成は同時に技術の習得を伴ふ。蓋し技術を習得せしめなければ設備を必要としないからである。而も此資本輸出が進行するほど、資本主義國の生活は安逸となり、物價も亦高かるべき事情にある。其結果、今まで商品の賣込先であつた半植民地的後進國の生産費が安く、其商品の進出が急速に行はれる。進みて、賣込まれたる設備が新鋭のものであり、先進國に於て舊き固定資本の更新をなすことを得ず、其結果、生産設備そのものに於ても優劣の差のあることがある。日本の紡績業と英國のそれとの比較についても、さういふ觀察をする人人もあるが、これはある程度まで肯定せられねばならぬであらう。さうすると、今まで半植民地的地位にあつた後進國は一躍して古き資本主義國の競争者となる。此競争に於て、古き資本主義國は僅に技術上の優越が許す程度まで對抗の能力を有するものであるが、一たび此優越の危くせらるるや、優劣強弱其位地を換へなければならぬことと思ふ。

此の如くにして、資本主義經濟の發達の速度は、決して既存の植民地の大きさ、外部市場的勢力の大きさと比例し

ない。急速なる發達を遂げ、従つて外部市場を必要とすること最も多いものは、現に之を有しないものであるといふ事情が生ずる。かゝる事情の下に於ては、市場爭奪の對立が爆發せざるを得ないであらうと思はれる。生産と市場との釣合が保たれず、巨大なる資本の生産力に狭い市場だけが與へらるるといふ情勢は、決して永續し得ないであらう。勿論、半植民地乃至勢力範圍に於ける資本主義生産の發達は、自國だけの市場を自國の資本に保留するに至ることは、別に急激の衝突なくして行はれ得るであらう。けれども、資本主義國相互の市場爭奪に至つては、民族的對立の深刻である限り、はげしき衝突とならざるを得まい。

要するに、資本主義が自己を貫き通す限り、進路はむしろ超帝國主義的なものに向ふ。たゞ現實に於ける非合理的要素は未だ無力ではない。その作用するところ、國際間の對立、戰爭へと導く可能がつねに存する。